

多摩セクション

東京マガジンバンクカレッジ

2018.1
第3号

多摩を歩く～江戸から東京へ散歩～

秋



東京都立多摩図書館

『東京マガジンバンクカレッジ』第3号の刊行にあたって

『東京マガジンバンクカレッジ』第3号は、多摩セクションのイベント「多摩を歩く～江戸から東京へ散歩～秋」（平成29年11月5日実施）にご参加いただいた皆様から原稿をいただき、作り上げた雑誌です。

「多摩を歩く～江戸から東京へ散歩～秋」は東京マガジンバンクカレッジ多摩セクションの講演会「江戸から東京へー多摩万華鏡ー」（平成29年5月28日実施）に参加された方が、講演で紹介された場所を実際に歩いて、学んだ知識を体感したイベントです。しかし、それだけではありません。現地で感じ、体験したことを写真や文章で綴り、さらに何人かの方には編集作業にもご協力いただいて1冊の雑誌にまとめました。

今回の散歩では、玉川上水をたどりつつ、困難な事業を成し遂げた人々の思いに触れていきました。参加者の皆様と一緒に、多摩の歴史の奥深さと散歩の楽しさを味わうお気持ちでお読みいただきたいと思います。

表紙の解説

玉川兄弟像

玉川上水の開削に大きく貢献した、庄右衛門・清右衛門兄弟の像。
昭和33(1958)年に建立。

目次

■ 講師紹介	2
■ 当日の行程	6
■ 当日の地図	8
■ 玉川上水	12
■ 清流の復活	22
■ 武蔵野の新田開発	28
■ 江戸東京たてももの園	34
■ もっと詳しく知りたいときは	40
■ 「東京マガジンバンクカレッジパートナー」の御案内	42
■ 執筆者一覧	43
■ 編集後記	44

講師紹介

多摩を歩く ～江戸から東京へ散歩～ 講師



せん だ なお と
仙田 直人 氏

品川女子学院高等部校長
(前東京都立三鷹中等教育学校校長)

講師コメント

——「多摩を歩く」を振り返って、いかがでしたか？



このように講演会に加え、史跡散歩まで取り入れた企画を実施して頂いた都立多摩図書館には大変感謝しております。夏は「近現代の多摩」を、秋は「近世の多摩」をテーマとして、講演会で話したように、教科書に載

る歴史と実際の多摩地区の史跡を結びつけながら歩きました。そのため、市町村単位ではなく、多摩地域全部を視野に入れたことから、九つの市の史跡を横断する広範囲な史跡見学となりました。歩く距離は長くなりましたが、疲れも見せず、拙い私の説明を熱心に聴いて頂いた参加者の皆様には感謝する次第です。

今回の企画を通して、歴史教科書の記述が多摩地域の史跡からでも読み取れ、尚且つそこには様々なドラマがあることを実感して頂けたら幸いです。そして、今回の講座を通して、皆さんの琴線に触れる事項がありましたら、有り難く思います。

そして、その興味を更に深めるため、是非とも図書館を活用して頂けることを心から期待しています。本や雑誌で読んだことを肌で感じた時に歴史の楽しさは広がり、人生の豊かさにも繋がると思います。だから、歴史散歩は止められません。

——11月5日の「多摩を歩く」の中で、特に伝えたかったスポットは、どこですか？



今回の「多摩を歩く」のメインは、何と言っても「玉川上水」です。今回の企画を通して、今から 370 年以上も前に、約 43 キロに及ぶ上水をたった 8 ヶ月で開削した、玉川兄弟を初めとする江戸の人たちのエネルギーを伝えたかったのです。工夫を凝らした投げ渡し堰が設けられた羽村堰、掘替えの苦労が伺える旧堀跡、新田開発の命とも言うべき分水、今でも残る真っ直ぐな短冊状の新田跡、人の心を今なお和ませる小金井桜などを歩き、様々な顔を持つ上水を実感して貰えたならば有り難いです。

——最後に、参加者の方へのメッセージをお願いします。

疲れも見せず 20 キロ近くを踏破した参加者の皆様方には、本当にお疲れ様でした。満足して頂けたでしょうか。今度、このような企画がありましたら、今回触れなかった「古代・中世の多摩」を歩きましょう。また、お会いできることを楽しみにしております。有り難うございました。



仙田 直人

講師著作

『東京グローバル散歩』（山川出版社 2016）
 『江戸から東京へ』（東京都教育委員会 2013）
 『東京多摩散歩 25 コース』（山川出版社 2004）
 『東京山手散歩 25 コース』（山川出版社 2003）
 『東京下町散歩 25 コース』（山川出版社 2003）



当日の行程 平成29年11月5日(日)



当日の地図 午前



当日の地図 午後



玉川上水



玉川上水



人口増加に拍車がかかり、飲料水不足に直面した江戸時代初期。その対策として、承応元(1652)年、玉川上水開削の計画が立てられました。非常に大掛かりな工事でしたが、承応3(1654)年6月に竣工し、飲料水の供給以外にも、武蔵野台地の村々に生活用水・灌漑用水としても分水され、新田開発に重要な役割を果たしました。

前略 玉川兄弟様

これまで何度も訪れている『羽村取水堰』に、また縁あって、行かせていただきました。庄右衛門さん清右衛門さんの銅像にも、勿論おあいしてきました。測量の技術に秀でていたとはいえ、高低差のほとんどない土地に、自然流下式の用水を、短期間にしかも約43kmにわたり、掘り進めるのは、本当に並大抵なことではなかったですよ。まずは、取り入れ口の決定、大岩や水喰土の回避等で、途中資金も底をついてしまったのですよね。でも、決してあきらめなかった！ 難工事を終え、苗字帯刀を許されたものの、玉川家の繁栄はなかったと、文献で目にすることがあります。会津の鶴ヶ城で、玉川上水の記述を見た時には、勝手に誇らしかったです。玉川様は、今の世の源を作った英雄という思いで、またお二人の銅像を見上げにいきます。

池田 雅子



現在玉川上水沿いに住み、遊歩道の四季折々の美しい自然に癒される毎日です。仙田先生のお話を伺いながらの散策は、とても興味深いものでした。羽村堰は二度目ですが、第一、第二水門の、鉄や丸太、砂利を利用して作られている仕組は、基本的に当時のものと変わらないとのこと。測量技術や機材も現代と格段に違う中での、四谷大木戸43km、高低差100mの半年の工事。360年以上前の江戸の先人達の知識と苦労が、大いに忍ばれました。その後、茫漠たる原野武蔵野台地は、次々と新田開発が進みました。我が家の周辺にも小川榎戸等、新田に因む地名が残ります。名前の由来にも思いを馳せながら、歴史ある玉川上水を改めて大切にしていきたいと考えました。

Y.O



ちょっと寄り道

中里介山について



『大菩薩峠』の著者である中里介山は明治18年に羽村堰近くの農家に生まれました。小学校を卒業後、家族を養うために電話交換手や小学校の代用教員などをしながら独学で勉強を続けました。

その後上京し、都新聞社に入社した介山はその才能を開花させ次々に作品を発表し、ついに『大菩薩峠』の連載を始めます。連載が好評を博すと、介山は執筆に専念するため再び多摩へ戻ります。多摩地域を転々としながら執筆を続け、晩年は故郷の羽村で農業経営と村塾経営に情熱を傾けました。

介山は個人雑誌『峠』に羽村堰前方の多摩川の写真とともに「わが古さと」と題した以下の文を寄せています。

「これは わがふるさとである 前の丘陵は 秩父山脈の餘派で
その下を 流れてゐる川は 多摩川である 多摩川も此處で 堰
かれて 上水となつて 江戸以来の 帝都の人の生命 となる。
(以下略)」

介山にとって故郷といえば豊かな水を湛える多摩川のことだったのかもしれませんが。

人生のほとんどを多摩地域で過ごした介山は昭和19年にその人生を閉じました。遺骨は禅林寺の境内裏手に埋葬されています。未完の大作『大菩薩峠』の結末を想像しながら訪れてみてもいかがでしょうか。



台風の名残りで荒れる多摩川から分かれ、水はゆったりとした流れに変わっていた。

360年前、ここから「四ッ谷内藤新宿大木戸」までの43キロを、人手のみで築き、たった8ヶ月間で通水させたという玉川上水。しかも一段と高台にある、武蔵野の分水嶺を縫って。

指揮した玉川兄弟とは、どのような人達だったのだろうか。

椎や櫨の実を踏みしめ、上水脇の道に行く。

水路は意外と深い。

見上げると、林のように続く木々の葉が色付き始めていた。

あの日、武蔵野夫人達は、この様な道を彷徨ったのだろうか。

水は葉脈の様に細分し、水車を回し、台地を潤し、豪農も生んだ。
付け書院のある茅葺農家から、見学の子供たちの歓声が漏れてきた。
嘗て、この屋ではどのような声が、響いていたのだろうか。

書を求め、そろそろ図書館へ戻ろうか、と・・・？

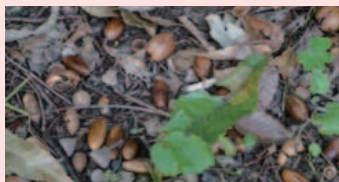
河西 裕



小金井市指定有形文化財 吉野家



玉川兄弟の像



玉川上水 羽村取水堰



玉川上水 遊歩道

11月5日、『江戸から東京へ散歩 秋』に参加しました。

企画された都立多摩図書館の担当の方々や、講師の仙田先生にはいつも大変にお世話になり、有り難うございました。

私は高校生の時から、50年近く玉川上水沿いの遊歩道近くに住んでいます。

四季折々に変わる樹々の表情を毎日眺めながら、豊かな自然の中に暮らす幸せを感じています。

今回のイベントは、その玉川上水の取水口から流れに沿って歩くというもので、日ごろ身近ではあっても知らないことの多い上水を知る良い機会になりました。

1653年4月から取水堰の工事を始めて、8ヶ月後(閏月を含む)の11月には四谷大木戸までの水路43kmを完成させたそうです。

順次工事を進めたのではなく、何カ所かで同時進行で進めたようです。その為には測量の技術が相当に優れていなければなりません。玉川兄弟はどのようにしてその技術を習得したのかと、新たな疑問も生じました。

玉川兄弟の銅像は、何回か見ていますが、片膝をたてた弟の清右衛門が持っているのが測量棒、後ろに立っている兄の庄右衛門が持っているのが測量綱であると、初めて気が付きました。とにかく現場で話を聞くと、驚きも感激も深く、充実した一日でした。

上岡 和江



羽村取水堰より多摩川左岸を下流に下ると玉川上水の間の利用可能な平地(旧河川敷を用水開削土砂で嵩上げ?)が広がり、地図上では最大幅約180mで、加美上水公園では逆に約110mまで狭くなる。仙田先生の現地レクチャーの玉川上水を東に40m付け替えた箇所である。河川敷は、グラウンドやマンション、戸建住宅、コンクリート工場、特養ホームに利用されている。福生市の都市計画図には、加美上水公園より多摩川左岸沿いに「砂利線跡」の表示があった。「青梅線福生河原支線」の廃線跡で、福生駅から砂利採石場までの1.8kmを昭和2年から34年まで運行されていた。当日散策した場所をかつて砂利満載の貨車が横切っていたシーンを想像すると急に臨場感がある。

小林 圭介

奥多摩街道から多摩川を覗くと、そこに無造作にその遺構は佇んでいる。「羽村取水堰」眼前に広がるそのスケール感に圧倒される。承応2(1653)年、江戸の人口増加に伴う水不足解消の為、幕府から工事を請け負った玉川庄右衛門・清右衛門兄弟の尽力で玉川上水が造られた。羽村取水堰は多摩川の水を取り入れる為に上水開削時に設置され、全長約380mの投渡堰と固定堰で構成される。1911(明治44)年に改築され、現在は木製からコンクリート製となっている投渡堰であるが、堰の仕組み自体は江戸時代から基本的に変わっておらず、当時の技術の高さを物語る。江戸時代にはその景観の美しさから「羽衣の堰」と呼ばれ、現在は新東京百景にも選定されている。一見の価値あり。

ケンケン



水喰土公園



今回の散歩で訪れることができませんでした。玉川上水と関係が深い場所に「水喰土公園」があります。この水喰土公園は福生市熊川地区の、玉川上水にかかる五丁橋の近くに位置しています。

玉川兄弟は、玉川上水を完成させるまでに開削工事を2度失敗しています。その2回目の工事を中断した場所が、ここ水喰土公園といわれています。伝説によると、四谷まで堀を完成して水を流すと、熊川村の水喰土というところで、ことごとく地中に吸い込まれて無くなってしまった、といわれています。その伝説を裏付けるかのように、この公園には開削工事跡と思われるくぼみがあります。福生市が1990年に公園として整備したため、公園内にある約40メートルの空堀を今でも見ることができます。

また、大幅な堀替えを余儀なくされたため、新たな堀割工事に従事させられた村民の苦難の思いが「みずくれえど」の俗称となり「水喰土」という地名として定着した、という説もあります。

玉川兄弟の苦労をしのぶべく、一度訪れてみてはいかがでしょうか。



この度の、上水の開削や新田開発を行った江戸時代の多摩地域を体感するという企画は、私には久しぶりの川との出会いでした。長年、山登りをやってきた私としては、多摩川の源流(笠取山)では散々遊んできたものでした。

その時から、ここが東京都の重要な上水道水源であることを聞かされていました。

その多摩川は1653年、ここ羽村での掘り割り工事で取水され、一年後に江戸の四谷大木戸までの43kmを、武蔵野を延々と流れることになったのです。

羽村堰から四谷大木戸までの高低差92m、100mにつき21cmとのこと。

この水路を開削したのが後にこの功績により玉川姓を与えられた庄右衛門と、その弟清右衛門。

仙田先生からは先ず、そんなお話をいただきました。

羽村堰での多摩川との出会いは、迫力ある川の流れに、よく「あの一滴」が、ここまで無事に来れましたね、っという感慨にとらわれました。

しかしまあ、この玉川上水を開削した玉川兄弟の苦労たるやいかなるものであったであらうでしょう。

地面に水が吸い込まれてしまうところや、工事の途中岩盤に当たってしまったこともあったとか。

玉川上水は江戸に飲料水を運んだだけでなく、分水を引くことで飲料水の確保が難しかった武蔵野に多くの村が開かれたそうです。

興味深い旅でした。

ありがとうございました。

近々に四谷大木戸を訪ねたいと思います。

土竜

清流の復活



清流の復活



羽村堰から流れて来た玉川上水は、玉川上水駅近くにある小平監視所へ入り、かつては淀橋浄水場へと送られていました。昭和40(1965)年に淀橋浄水場が廃止され、現在は暗渠で東村山浄水場へと送られています。

淀橋浄水場が廃止されて以来、上水の流れはここで途絶えていました。しかし、上水復活を望む地域住民の強い要望により、清流復活事業の一環として昭和61(1986)年に昭島市の多摩川上流水再生センターで高度処理された再生水が流されることとなりました。

これにより、流れが絶えて久しかった上水路にせせらぎが甦り、現在では地域の方の憩いの場として親しまれています。

小平監視所で玉川上水から分かれて流れてきた多摩川の水は、約900mにわたり明治時代初期に掘られた地下の素掘りのトンネルを流れ、ここ、新堀用水の胎内堀の出口で顔を出します。トンネルとトンネルをつなぐために掘った竖穴も複数現存しており、このような地下水路のトンネルが工事用の竖穴と共に現在も残っているのはとても貴重なことと思います。いずれ改修工事が予定されているため、今が見納めかもしれません。すぐそばを平行して流れる玉川上水と新堀用水周辺の森林も心地よく、散策にももってこいの場所です。ただし、胎内堀の出口は低くかつ滑りやすいところにあるため、ご覧になる際は足元に十分お気を付けください。

工藤 麻衣子



西武拝島線、多摩都市モノレールの玉川上水駅で下車し南口広場に出ると玉川上水の緑道が目に入る。上水沿いの緑道を300mほど下流に歩くと都水道局小平監視所がある。脇から坂を下ると組まれた岩場から水が幾筋かの滝となり流れ落ちており、その先の上水小橋は玉川上水で唯一水辺に下りていける場所で深山幽谷の趣が漂う。橋を渡り対岸緑道に上ると昭和61年に小平監視所より下流の流れがよみがえったのを記念する「清流復活」の碑がある。羽村堰で取水された水は約13kmの旅をし小平監視所から東村山浄水場へ管で送られており、ここから下流の水は高度処理された再生水だそうだが、流れの音も心地よく玉川上水の中でも魅力的なスポット。

K.H



僕らは、玉川兄弟が作ったマップ上の1キャラクタとして存在しているだけかもしれない。

「A列車で行こう」というRPGはご存知だろうか。まっさらなマップ上に一から線路を敷設し、電車を走らせると、次第に建物がたち始め、街へと変わり、そして広がっていくというものだ。

線路を水路に、電車を水に置き換えると江戸時代版「A列車で行こう」で、玉川兄弟は、リアル版で多摩マップを作った、と言ったらお叱りを受けるだろうか。小川九郎兵衛は、そのマップ上に、玉川上水の分水(小川用水)を作り、現在の小平市小川町周辺を開拓していった。

1965年の淀橋浄水場閉鎖以降、以降の水路は枯れていたが、高度処理した下水を流すことで往時が甦った。岩の間から落ちてくる爽快感のある水、清流復活の碑のある場所だ。そこを起点に玉川上水の流れを心地よく感じながら青梅街道に入ると、青梅街道に対して垂直に整備されたまっすぐな道が幾重も続く。当時、開発にあたり整然と地割を行ったためだ。当時の名残りを時折感じながら小平神明宮入口にある小川村開拓碑へと到着する。

伴 勝宏



玉川上水と酒



多摩地域には言わずと知れた銘酒が数多く存在します。それらは江戸時代から続く酒蔵が多摩の水で醸した伝統の味です。日本酒は水が大切と言いますが、多摩の酒蔵では井戸や湧水から日本酒醸造に適した秩父奥多摩伏流水などを得て、美味しいお酒を醸しているそうです。

「多摩を歩く 秋」で訪れた田村酒造もそんな酒蔵の一つです。こちらは文政5(1822)年創業で、田村家は敷地内に玉川上水から取水した田村分水が流れる福生の名主でもありました。当時分水を得るには幕府の許可が必要で、個人が分水を認められた例は非常に珍しいそうです。

コラムをお読みの方の中には「この水を酒造りに使わないの？」と思った方もいらっしゃるかもしれませんが、こちらは精米用の水車を回したり、農業用水に使ったりと生活用水として使われていたそうです。

田村酒造の軒先には酒蔵であることを告げる立派な杉玉が吊るされていました。普段はビール派の大人の方も今日は多摩のお酒を飲みながら、多摩の歴史に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。



武蔵野の新田開発



武蔵野の新田開発



明暦2(1656)年に、小川九郎兵衛の主導により小川村がひらかれました。以降、小川家は小川村の中心的存在となります。小川家がどれほど力を持っていたのかは、小平ふるさと村にある「旧小川家住宅玄関棟」からも見て取ることができます。

小川九郎兵衛の時代には、新田開発をすることが非常に困難でしたが、第八代將軍徳川吉宗が享保の改革を進める中、新田開発が推奨されるようになりました。これを機に、武蔵野には約80もの新田村がひらかれ、開発が進んでいきました。

11月5日は、あちこちで白いサザンカの花が咲き始めていました。おりしも、トランプ米国大統領が、横田基地に降り立った日で、上空ではヘリコプターの騒音がしていました。

小平ふるさと村は、以前から行ってみたいと思っていた所です。玉川上水の開通によって開かれた小川新田の様子がよくわかるように、昔の住居が復元されて展示されています。なかでも、開拓当初の住居は、藁葺き屋根、細竹を編んだ床にむしろを敷いただけというとても粗末な作りで、当時の開拓農民の苦労が偲ばれました。

私は、埼玉県北部の農村で子供時代を過ごしました。武蔵野の端の方です。小平ふるさと村の旧神山家住宅前の高垣である「かしぐね」や、中に展示されている昔の農機具などに、田舎の暮らしを思い出し、懐かしさを感じたひとときでした。

鷹野みちよ



トランプ米大統領が米軍横田基地に到着したその日、上空はヘリコプターの音。川越のゴルフ場へ向かっているのかと思わせる現実と、足は三百年前の歴史を体感する玉川上水の道がある。

時代は江戸初期、水の確保のための多摩川より水を引く大事業、玉川上水である。

この玉川上水から分水をひくことで、武蔵野台地の新田開発にも利用され、多くの村がひらかれた。ここに小平市域で新田村落として最も古く開発されたのは小川村である。主導した小川九郎兵衛は苗字が村名となるほどの名主であった。小川橋より立川通りを進むと小川寺があり、この九郎兵衛のりっぱな墓がある。お参りをしてから、バスで小平ふるさと村へ向かう。ここは小平、花小金井駅より徒歩20分、バスも出ている。

ふるさと村は平成5年に開村され、郷土の文化遺産として後世に伝える役割をしている。寄贈を受けた旧小川家住宅玄関棟他4棟の建物を解体保管をしている。なかでも、開拓当初の復元住居は小川家に残る古文書に基づいて復元されており、当時の小平開拓農民の生活の様子がうかがえる。また、伝統食で、当時のおもてなしだった「小平糧うどん」も土・日限定食で食べられるのも楽しみである。

昔を懐かしみながら心地良い空間でひと休みして次へと足を進めた。

土屋 憲一



小川九郎兵衛は、玉川上水と野火止用水の分水地点から東側に新田開発を進めた人物で、新田の名残は街道に対して垂直に交わる道路で垣間見ることができる。小川九郎兵衛が眠る小川寺から青梅街道を東に数キロ進んだところに小平ふるさと村がある。ここには、小川家に残る古文書に基づいて復元された住居があり、開拓当時の農家の様子を身近に感じられる。また、移築された旧小川家住宅玄関棟があり、その堂々とした佇まいは小川家の名主としての実力を示しているかのようで、当時の様子に思いをはせることができる。

K.T

小川新田は1600年中期から20年足らずで野火止用水と玉川上水の間の開発が行われているようです。小平ふるさと村で当時の開発に関わった人々の掘建て小屋を見ると、鋤一本で武蔵野の雑木林を開拓していった先人達の苦労は想像をはるかに超えているようです。関東ローム層の痩せ地で、ゼロからの出発の中、人々がその苦勞を乗り越えることが出来たのも、よりどころとなる神明宮、小川寺の存在が大きな役割を担ったと思われます。小川分水と玉川上水の間を結ぶ何本かの平行に真っすぐな道と神明宮の森が、当時の面影をかすかに思い起こさせてくれます。

吉田 節子



近くにありながら小平ふるさと村を訪ねるのは今回が初めてであった。「小平開発の歴史」というテーマが明確であり、非常にコンパクトながら興味深いスポットであった。特に、(この場所に限らなかったが)先生による大変判りやすいご説明が、展示建物と小平家との関係、由来等の理解をより深めてくれた。

主要な5つの建物のうち、開拓当初の復元住居は他では見たことのない特徴的なもので、軒がかなり低く内部は竹簀の子床や筵敷である。新田開拓時代の生活の厳しさが偲ばれる。さらに、建物の前には耕作地を再現してあって、実際に大根を栽培しているのも面白いと感じた。

ふるさと村は、歩道が併設されている多摩湖自転車道沿いにあるので、花小金井か小平の駅から徒歩20分の道のりを、他の施設等も併せて楽しむのもお勧めである。

吉田 眞



ちょっと寄り道

小金井桜について



小金井の桜として知られる玉川上水兩岸の桜並木は、享保年間(1716-1736)八代將軍吉宗の時代に、武蔵野新田の世話役を務めていた川崎定孝(通称平右衛門)が中心になり、吉野山などから取り寄せた山桜の苗を植えて作ったものと伝えられています。

植えてからしばらくは、遠方から見に来る人は稀だったといわれますが、寛政年間(1789-1801)頃から「四神地名録」「江戸名所花暦」など多くの地誌や浮世絵に描かれ、江戸市民や文人墨客の遊覧の地として賑わうようになりました。『江戸名所図会』は、桜花の美しさと賑わいの様子を次のように伝えています。

金井橋の辺りは佳境にして、爛漫たる盛りに、兩岸の桜、玉川の流れを夾んで一目千里、実に前後尽くる際をしらず。ここに遊べば、さながら白雲のうちにあるがごとく、蓬壺の仙台に至るかとおやしめる。もつとも奇観たるゆゑに、近年都下の騷人韻士、遠きを厭はずしてここに来り、遊賞す。

しかし、植樹から数十年も過ぎると、枯木化、古木化する木が目立つようになり、嘉永3(1850)年、安政3(1856)年には補植が行われました。地元の村が桜の苗を植え継いだことを記念して建てた石碑が関野橋の近くに今もあり、「さくら折るべからず」の言葉と「桜樹接種記」が刻まれています。

平成13(2001)年には、大正時代に岩手県北上市展勝地公園に移植された小金井桜の子孫が、老齡化や排ガスの影響で樹勢の衰えた小金井に里帰りすることが新聞で報じられました。また、平成21(2009)年には『小金井市史資料編 小金井桜』が刊行されています。特定のテーマが市史資料編の1冊となることは稀です。小金井の桜は地元の誇りであるのみならず江戸文化研究の大きなテーマであることを表すものといえるのではないのでしょうか。



江戸東京たてももの園



江戸東京たてももの園



江戸東京たてももの園は、東京都が平成5(1993)年に都立小金井公園の中に、江戸東京博物館の分館として建設された野外博物館です。

ここでは東京の歴史を振り返り、江戸時代から戦後までの現地保存が不可能な文化的価値の高い歴史的建造物を移築し、復元、保存展示している。当初は12棟であったのが、現在30棟、園内は大きく3つのゾーンに分けられ、再現された建造物や展示、催し物なので当時の暮らしぶりを楽しく知ることができます。交通機関はJR中央線「武蔵小金井駅」、西武新宿線「花小金井駅」どちらもバスで5分程です。(土屋 憲一)

小生もごく近くに住まいしながら、実業家西川家の立派な実績を全く存知ませんでした。ご子息などが現在は、総合建築業、さらに介護、看護方面などでも地域の皆さんにご尽力されておられるとのことようです。

さっそく西川家ゆかりの各地をゆっくり、探して歩きたいと思っています。

竹村 紀雄



桜の名所で都内最大級の公園「小金井公園」の一角に「江戸東京たてももの園」があります。面積約7Haの広大な敷地に、文化的価値の高い歴史的建造物が数多く復元・保存・展示されています。「八王子千人同心組頭の家」や製糸会社を創立した西川伊左衛門が建てた「西川家別邸」など多摩地域ゆかりの住宅や昔の商家・銭湯・居酒屋など30余の建物が並んでおり、往時の暮らしや風情を思い浮かべながら鑑賞することができます。一番のお勧めは「高橋是清邸」で、港区赤坂にあった住居の母屋と玄関を移築・復元したものです。邸の跡地は高橋是清翁記念公園として一般公開されています。2階の奥の部屋が痛ましい現場で、昭和11(1936)年2月26日決起した青年将校らの襲撃を受け、この部屋で暗殺されました。

松崎 克彦



消えてしまった“天明さんの森”

「江戸東京たてももの園」には、江戸から東京へ、時代の移り変わりを映して新旧・和洋の貴重かつ興味尽きない建物が集められているが、中でもひととき異彩を放っているのは、園内東ゾーンの左手前に位置する天明(てんみょう)家の屋敷である。

いかにも豪農の住まいを思わせる豪壮な長屋門と千鳥破風を持つ茅葺の大屋根の母家(入園チケット掲載の写真参照)の存在感は、まことに圧巻というほかない。

天明家は、大田区鵜の木にあった室町時代から続く旧家で、江戸期には鵜の木村の名主を務めたといわれる。2015年1月18日付朝日新聞に、次のような記事が掲載されている。

大田区の高級住宅地にあった自然林が昨年末、マンション開発のため伐採された。江戸時代からほぼ手つかずの「奇跡の森」を残そうと住民が立ち上がり、区も買収を目指したが実現しなかった。なぜ守れなかったのか。伐採されたのは、大田区鵜の木1丁目の個人宅の敷地内の林。環状8号線に面し、田園調布に近接する好立地にもかかわらず、約9千平方メートルのほとんどが樹木で覆われていた。地域住民からは、地主にちなみ「天明(てんみょう)さんの森」と親しまれていた。(中略)住民や親族によると、「江戸初期に敷地に接してつくられた用水路が完成してから、ほとんど人の手が入っていない」という。(後略)

諸行無常・栄枯盛衰は時の流れとともにあるとはいえ、住宅街の貴重な屋敷森としての命脈を江戸期から保ち続けた“天明さんの森”の消滅の報を読むにつけ、“失われたものの価値の大きさ”に、ただただ肅然とするばかり…。

M

旧光華殿について



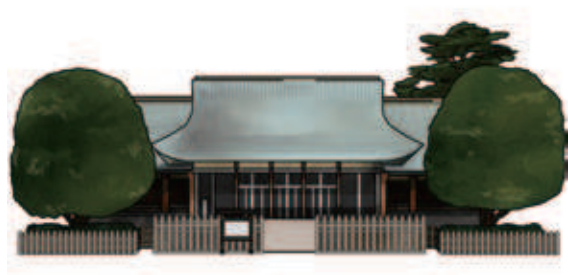
江戸東京たてもの園のビ
ジターセンターは、旧光華殿とも
呼ばれます。

旧光華殿は、昭和15(1940)年に
皇居前で行われた紀元2600年を
記念して行われた式典のために
建設されました。雑誌『写真週
報』143号には、この式典の様
様が収められており、当時の旧光

華殿の様子を見ることができます。建物は入母屋造杉皮葺き、建築
面積740㎡、両翼部と中央部からなり、柱間には建具を入れず吹き放
ちとなっていました。

式典終了後は解体され、昭和16(1941)年に小金井に移築されます。
移築後は、国民錬成所、教学錬成所を経て、戦後は東宮御仮寓所等と
なりました。そして、昭和29(1954)年からは建具を整備した上で、武
蔵野郷土館の入口及び展示室として一般に公開されるようになりました。

このように幾多の変遷を経て、現在は誰もが気軽に立ち寄れる無
料のビジターセンターとして、多くの人で賑わっています。



もっと詳しく知りたいときは

東京マガジンバンクには、多摩地域の人々の暮らし、文化、歴史等を扱った様々な地域情報誌があります。講演会「江戸から東京へー多摩万華鏡ー」では、会場の一角にこれらの地域情報誌を展示しご覧いただきました。

また、専門的な雑誌に多摩地域に関する記事が掲載されることもあります。ここでは、散歩で訪れた「玉川上水」や「新田開発」に関する記事のうちいくつかをご紹介します。

是非ご来館いただき、豊かな雑誌の世界をお楽しみ下さい。



『たまら・び』 21 巻 1 号通巻 94 号（多摩情報メディア 2017.1）

『たまら・び』は多摩地域の情報誌として多摩の魅力を発信している雑誌です。毎号一つの特集を組むとともに、多摩地域の市町村を一つ取り上げて、住んでいる人にも、まだ知らない人にもまちの魅力を再発見してもらう「まちの楽しみ方」を提案しています。

この号では特集を「まちの酒場、まちの地酒。」と題して味のあるお店や多摩地域の銘酒を紹介しています。「多摩を歩く 秋」で訪れた田村酒造も掲載されています。

雑誌を読んで気になるお店に出かけてみるのも「多摩を歩く 秋」の復習になるかもしれません。

『多摩のあゆみ』 4 号（たましん地域文化財団 1976.8）

「特集 玉川上水」 巻頭～p.51

『多摩のあゆみ』 34 号（たましん地域文化財団 1984.2）

「特集 玉川上水 そのⅡ」 巻頭～p.58

今回の地域散歩では、羽村堰や玉川兄弟像等、玉川上水に関連する場所を多く訪れました。雑誌『多摩のあゆみ』4号と34号では、玉川上水の特集し、計17点の記事が収録されています。記事の切り口は様々で、運河計画、開削工事の様子、明治時代の新聞記事から考察したもの等、多岐に渡っています。興味のある記事をぜひ多摩図書館でご覧ください。

『学芸地理』 63 号（東京学芸大学地理学会 2008.12）

「武蔵野国多摩郡小川新田における開発目的の時代差」 p.1-11

小川村は、小川九郎兵衛によってだけでなく、2度にわたって新田開発がなされています。この雑誌記事では、初期の開発、中期の開発がどのようなものであったか、古文書を引用しながら解説されています。また、それぞれの時期の小川村を「運送」と「土地生産力」という2つの面から対比することで、村の発展、役割の変化についても言及しています。ご興味のある方は、一度ご覧になってください。

『多摩のあゆみ』 第 23 号（たましん地域文化財団 1981.5）

「特集 八王子千人同心」

八王子千人同心は、八王子及び周辺地域に居住した江戸幕府直属の郷土集団です。日光勤番、江戸火消役などの警備役を担うのみならず、特に江戸時代後期には組頭の中から地域文化の発展に尽くす文化人を輩出しました。

この特集号では、千人同心成立の経緯、月番制度の実態、同心生活の様相などのほか幕末の蝦夷地移住、明治期復族復禄運動など徳川政権成立から明治に至る三百余年の間に変質を遂げていった八王子同心の生活と気概がうかがわれる論考が掲載されています。

「東京マガジンバンクカレッジパートナー」の御案内

【東京マガジンバンクカレッジ】

「東京マガジンバンクカレッジ」は、「雑誌の魅を知る・創る・伝える」というコンセプトのもとに、「雑誌総合」「鉄道」「多摩」の3つのセクションがそれぞれ又は合同でワークショップ、セミナー等を継続的に行い、雑誌を仲立ちとする学びと交流の拠点を作り上げることを目指す活動です。



雑誌をつくるワークショップ

【東京マガジンバンクカレッジパートナー】

東京マガジンバンクカレッジは、参加していただくだけでなく、図書館職員と協力してイベントを作り上げていく方を求めています。その役割を担うのがパートナーです。

パートナーに登録していただくと、カレッジのイベントや雑誌に関する情報をメールマガジンでお知らせします。イベントの申込みはどなたでもできますが、応募者が定員を超えて抽選になったとき、一定の範囲でパートナーを優先いたします。



パートナーによるマガジントーク

パートナーの方には、講演会におけるマガジントーク、企画展示で展示するおすすめ雑誌やメッセージをお願いすることもあります。そして、将来的にはパートナー自身が主体的にイベントの企画立案から実施までを行うことを目指しています。

*パートナーには団体パートナーと個人パートナーがありますが、ここでは個人パートナーについて説明しています。

【パートナーになるには？】

パートナーになってみようと思われる方は、「パートナー申請書送付希望」とお書きいただき、下記宛メールをお送りください。折り返し申請書フォームをお送りします。申請書に必要な事項を御記入いただき再度送信してください。

その後、登録を承認した方にはメールで通知します。通知を受け取られたら、パートナーとしての活動が始まります！

なお、メールアドレスをお持ちでない方は、お電話で御相談ください。

是非パートナーに御登録いただき、一緒に東京マガジンバンクカレッジを作り上げていきましょう。

連絡先 Email：S9000044@section.metro.tokyo.jp

電話：042-359-4020

執筆者一覧

池田 雅子	伴 勝広
Y.O	鷹野 みちよ
河西 裕	土屋 憲一
上岡 和江	K.T
小林 圭介	吉田 節子
ケンケン	吉田 眞
土竜	竹村 紀雄
工藤 麻衣子	松崎 克彦
K.H	M



編集後記

今回の散歩に参加された方の記事はいかがでしたでしょうか。私たちの生活に身近な玉川上水ですが、知らないことがたくさんあったのではないのでしょうか。今回の散歩を通じて、新しい魅力を発見できれば幸いです。

講演会及び2回に渡る散歩の計画から案内までお務めくださった仙田先生に、心より御礼申し上げます。そして、講演会にご参加くださった皆様、今回の散歩に参加し原稿をお書き下さった皆様、お忙しいなか編集作業にご協力くださった皆様、この雑誌の発行に関係した、すべての方に御礼申し上げます。

それでは、『東京マガジンバンクカレッジ』第4号が発行され、また皆様にお会いできることを楽しみにしております。

東京マガジンバンクカレッジ 第3号

平成30年1月発行

編集 東京マガジンバンクカレッジ事務局

発行 東京都立多摩図書館

〒185-8520 東京都国分寺市泉町二丁目2番26号

電話 042-359-4020

ホームページ <http://www.library.metro.tokyo.jp/>



東京都立多摩図書館

